

日本ことわざ文化学会 第8回大会 大会報告

2017年11月11日、昨夜からの風がおさまり、おだやかな小春日和となった。第8回大会は、東京・御茶ノ水、明治大学の駿河台キャンパス、研究棟2階第9会議室で開かれた。

総会（11:00～12:00） 冒頭、時田昌瑞会長が挨拶された。「十年ひと昔」、本会の活動が十年近く続けられてきたと述べ、最近のアニメ番組の中でもことわざが使われていたことを例にあげて、着実な活動が社会に浸透しているとした。そして、同人誌発行のような新しい活動も含めて、今後も地道に一步一步進んでいきたいと結んだ。その後、司会の石原仁誌氏の進行で選出された議長の藤井渉氏に引き継がれて、総会の議事に移った。はじめに、2016年度の活動報告と会計報告が行われ、監査報告を受けて承認された。次に、時田会長より新年度の理事についての報告が行われた。新年度の理事は、会長をはじめ12人全員が再選され、役員も異動はなかった。さらに、新たな理事に、三木恒治氏（岡山理科大学教授）が選出されたことが紹介された。これらも承認され、新しい体制がスタートした。最後に、2017年度の活動計画と予算案が提出され、説明を受けた後承認された。全ての議事を終え、議長が解任されて総会は終了した。

総会を終えて午前の部が終了し、昼食・休憩をはさんで、午後の部（研究発表、シンポジウム）が、同じ会場で行われた。

研究発表（13:00～15:00）、司会 小森 英明氏（日本ことわざ文化学会理事）

研究発表① 鄭 芝淑氏（ちよん じすく、鹿児島大学共通教育センター准教授）

「日本語と韓国語の四字熟語について」

日韓両国の四字熟語のことわざを‘ことわざスペクトル’と‘PSリスト’という手法を使って比較分析した。

- ・ ことわざスペクトル (Paremiological Spectrum) : ことわざの認知度と使用頻度がより高い中核的なものから、より低い周辺的なものへと、同心円スペクトル状に分布するものととらえることができる。
- ・ PSリスト (Paremiological Spectral List) : 集めたことわざ辞典から、収録されていることわざを調べ、それぞれのことわざが収録されている辞典の数を度数として表し、その度数を段階として区分したリストを作成した。
- ・ PSリストの度数の高い例は、「岡目八目」「我田引水」。低い例は、「内憂外患」「言語道断」などである。韓国の四字熟語では、度数の高いものは非常に少なく、「咸興差使」（何の音沙汰もないこと）「皮匠羅場」（お互いさま）などだった。この日韓の違いは、四字熟語のことわざに対する両国の意識の違いである。日本は、ことわざに

比喩性が重要な特徴として見られ、韓国は、ことわざに「俗談（ソクタム）」という庶民の用いた慣用表現が多く、庶民性が重要な特徴として見られる。

- PS リストの度数分布では、日本より韓国の方が分散している。これは、両国の意識や辞典による選定の違いと考えられる。
- 日韓両国の度数の似たもの、違いのあるものなど、いろいろな場合でそれと同様な意味の中国の四字熟語の有無を比較したところ、韓国より日本の方が中国にない独自の四字熟語が多かった。これは、両国と中国との地理的な関係や交流の歴史の違いによるものと考えられる。
- 発表の後、現代の韓国のハンゲルの教育と漢字の四字熟語についてや、韓国でのことわざと接する機会などについての質問が出された。また、度数を調べてリストを作成する場合の辞典の選び方、冊数などが課題としてあげられた。

研究発表② 時田 昌瑞氏（ときた まさみず、ことわざ・いろはカルタ研究家）

「新案系いろはカルタとは何か？」

いろはカルタのうち、新案系について認識が不足していると考える。

- いろはカルタとは、広辞苑では、カルタの一種、読み札と絵札合計 96 枚を一組にしたもの、とあるが、この枠組みに入らないケースが多々ある。
- いろはカルタを系統別に分けてみると、江戸系と上方系に分けられる。中京カルタがあったという説もあるが、まだそれがあったことは確認できていない。江戸系は、ほぼ一致した形で続いている。上方系は、何種類かのパターンが集まった存在で、江戸系とは著しく異なっている。また、中国地方、四国地方に広まっている。この他に江戸系と上方系が混在している混交形と考えられるものがある。500～600 点のいろはカルタの資料から、江戸系でも上方系でもないものを新案系と見なして分類すると整理ができ、三つの系統の枠の中に収められるようになった。
- いろはカルタでは、江戸系の一番早いものが嘉永 5 年（1852）のもので、新案系の始まりは、天保・嘉永期のものがあつた。近年それより前の宝暦頃と思われるものが見出されている。ただ発行年は明示されていない。
- 新案系いろはカルタの特色として、その内容がことわざ辞典に載っていないものがあり、また、その言葉は継承されずに、新たなものが次々と作品化されている。このように新しく自分のカルタを作ることができるので、発信するツールとなることができる。
- このあと、図版の資料により、たくさんの実際の新案系カルタが紹介された。「世話いろは新絵解」「教訓いろはたとへ」「たとへすごろく」「ことわざ説明文カルタ」「金言いろはかるた」「戦後いろはカルタ」など、16 種にのぼる図版や言葉の読みの解説があり、新案系いろはカルタならではの珍しい図柄に深い関心が寄せられた。
- 参加者からは、江戸系と上方系の分類について、新案系いろはカルタの特色や個々

の制作意図について、などの質問がなされた。

シンポジウム (15:15~17:45)、司会 山口 政信氏 (明治大学名誉教授)

シンポジウムは、3人のパネリストの20分間程度ずつの発表とその後のパネリスト同士やフロアの参会者との意見交換という構成で行われた。今回のテーマは「理科とことわざ」である。

発表① 小出 統英氏 (こいで むねふさ、元東京都公立中学校副校長)

「理科の視点からことわざを視る」

「理科」「理」という言葉の意味から理科の授業を思い起こし、ことわざとの関連を視る。ことわざの中には、理科として腑におちないものもあるが、理科的な目で視るということで、ことわざを視ていく。

- ・ 理科的な言葉として、動物、植物、気象、天体などの用語の入っていることわざを探すとたくさんある。しかし、「犬も歩けば棒に当たる」のような理科的に解釈するには難しいことわざがある。一方、「カエルの子はカエル」のような理科的に説明できるものがあり、二つに分類できる。
- ・ 理科的な説明や意味合いがことわざになっているものがいくつもある。「青菜に塩」の潮解性や「三寒四温」の気象現象などのように、理科的な説明ができ、授業で使うのに妥当なものも見出せる。
- ・ 理科的なものの見方や思考につながることわざもある。理科的な現象や法則を教えや諭しとするものには、「光陰矢の如し」のように、そのスピードが生活の上での時間の大切さを表現し、「岡目八目」のように、客観的な見方の重要さを気づかせるものとした例としてあげられる。
- ・ 授業で使うことが可能であることわざは、いくつも見出すことができるが、教育現場においては、人権的な配慮を常に忘れることはできない。そのことから、ことわざを授業で使用する際には、こうした配慮が必要であることから、ことわざを十分に吟味しなければならない。

発表② 佐々木 信行氏 (ささき のぶゆき、香川大学教育学部教授)

「『点滴石を穿つ』の科学的妥当性に関する一考察」

「点滴石を穿つ (Constant dripping wears away the stone)」ということわざは、「どんな小さな力でも根気よく続ければ、いつかは成功し、事がなる」という意味で、小さな水滴でも、繰り返し当たると固い石もすりへるということからきている。

- ・ 現在では、強い圧力の水の勢いで石を切る機械はある。人工的でない自然界で石が水によって傷つくとすれば、物理的作用、化学的作用 (溶かす)、風化作用 (はがれる) が考えられる。石や水を研究してきた者としては、水と石と化学的相互作用をもとにした溶解時間を見積もることにした。

- ・ 石灰石（炭酸カルシウム）の溶解度から、化学的作用による溶解時間の計算を試みた。一滴の水（0.5ml）を1秒に1回ずつ、石灰石の上に落として、1gの穴を穿つには、約100年間余りかかる。これは、同じ場所に水滴を落とし続けることを前提としている。この水がものを溶かしやすい酸などの液性をもつものであれば、時間の短縮が考えられる。
- ・ 溶けやすい岩石として、岩塩の場合を考えてみた。溶解度が大きくなるので、時間は大幅に短縮され、約2時間程度になる。
- ・ まとめとして、石灰石の場合には、水では100年余りかかる。酸性雨や火山ガス、二酸化炭素をふくんだものでは、時間が短縮される可能性がある。また、岩塩の場合には溶けやすいので、大幅に短縮される。実際の「点滴石を穿つ」というのは、どうであろうか。
- ・ 他に、「塵も積もれば山となる」ということわざがあるが、自然界では難しいことだと考える。いろいろなたとえとなることわざがあるので、科学的に調べてみたいものを探していきたい。

発表③ 渡辺 慎介氏（わたなべ しんすけ、横浜国立大学名誉教授）

「俗信『雷が多い年は豊作』に関する一考察」

雷と豊作を結びつけたことわざがある。窒素化合物は、天然の肥料である。気温が高いと積乱雲が発達し雷が多いので、高温の年に作物がよく育つことと結びつけることも考えられる。空気中に多量に含まれる窒素の固定には、生物学的固定、化学的固定、雷などの放電による固定がある。

- ・ 岩手、福島、福岡、長野などの各地の民俗学的資料の俚諺集に、落雷、稲光、雷鳴など、雷と豊作を結びつけたことわざがある。それらを年代的にたどっていくと、19世紀までたどることができる。
- ・ 国外では、1752年にB・フランクリンが、雷は電気作用であることを明らかにし、1902年に、アーク放電による窒素固定が実現している。ヨーロッパでは、雷の放電により窒素肥料が作られる事実は、これよりずっと前から知られていたであろう。その後、アンモニア製造プラントがドイツの化学会社で完成され、現在では、日産3000トンのプラントが稼働している。
- ・ 「教師宮沢賢治のしごと」という本の中で、近くの変電所の周囲では作物がよく育つと話していた、とあり、放電による窒素固定という考えが伝わっていたことが確かめられる。このことから、雷による窒素固定という知識が伝わったのは、宮沢賢治の事例が古いものと確認できる。
- ・ 古くから、雷や稲妻によって稲が豊作になると知られていたが、このことわざは科学的知識によるものではない、ということが結論づけられる。

3人のパネリストの発表の後、パネリストの方々が壇上に並び、山口政信氏の司会により、パネリスト同士ばかりでなく、フロアの参加者も自由に発言した意見交換が行われた。地球温暖化や酸性雨のような科学的なこと、ことわざと認定されることとはどのようなこと、今回のテーマの「理科とことわざ」から発展して学校の他の科目はどうか、ことわざ辞典を読む楽しさなど、たくさんの発言により話し合いは広がり深まった。シンポジウムは、時間のたつのを忘れさせるほど盛り上がった。そして、司会の山口氏の「ことわざとはさみは使いよう」という絶妙な一言でシンポジウムは閉じられた。

懇親会（18：00～20：00）、司会 石原 仁誌氏（日本ことわざ文化学会理事）

熱のこもったシンポジウムを終えた後、会場を研究棟4階第2会議室に移して、懇親会が行われた。乾杯の後、なごやかな歓談の間に、司会に指名された方が次々にマイクを手にされた。新理事の三木氏、研究発表者とパネリストの方々、議長をされた藤井氏や穴田氏が、それぞれ思いを込めたスピーチをされた。会場では、杯を手にした話の輪ができ、親交をさらに深め、今日の会の労をねぎらい、明るい会話が飛び交ううちに集いの楽しい時間が過ぎていった。一人一人が、過ぎた一年を振り返るとともに、これからの一年への希望と決意を胸に、今回大会の全スケジュールを終了した。

（文責：蟻川 剛）